

安曇野市農業農村振興計画推進委員会(第2回)会議概要

1	審議会名	安曇野市農業農村振興計画推進委員会(第2回)
2	日 時	令和元年9月18日 午後1時30分から午後2時55分まで
3	会 場	安曇野市役所 本庁舎3階 共用会議室306
4	出席者	中島完二委員長、三澤育子副委員長、安田大樹委員、東本優子委員 中村明夫委員、丸山太悟委員、高橋修委員、平川邦夫委員、宮澤貞仁委員、須澤佳正委員、池上洋助委員、丸山昌則委員、白澤勇一委員、 興智幸委員、小池晃委員、清澤栄三委員
5	市側出席者	高嶋農林部長、堀内農政課長、小林農政課長補佐兼農業政策係長、 小穴生産振興担当係長、齋藤生産振興担当係長、中村集落支援担当係長、 平田マーケティング担当係長、農業政策係鈴木主査
6	公開・非公開の別	公開
7	傍聴人	0人 記者 0人
8	会議概要作成年月日	令和元年9月20日

協 議 事 項 等

1 会議の概要

(1) 開会(堀内課長)

(2) あいさつ(中島委員長)

(3) 協議事項

ア 「安曇野市農業・農村振興計画に係る平成30年度実施状況の点検・評価報告書」(案)について

イ 『R1年度推進委員会報告書』を受けての市の今後(R2年度以降)の取り組み方針(案)について

(4) その他

(5) 閉会(堀内課長)

2 協議の概要

(3) 協議事項

ア 「安曇野市農業・農村振興計画に係る平成30年度実施状況の点検・評価報告書」(案)及び『R1年度推進委員会報告書』を受けての市の今後(R2年度以降)の取り組み方針(案)について(事務局一括説明)

「安曇野市農業・農村振興計画に係る平成30年度実施状況の点検・評価報告書」(案)

【主な意見等】

(1) 担い手の確保について

● 担い手の確保について、具体策は難しい。明科地域についていえば、認定農業者が法人も含めて20数名いるが、認定農業者ですら、具体的な後継者がいないという事例もあるので、一般農業者も含めれば課題は大きいと思う。

● 天王原の荒廃農地再生事業の継続で、今年度から新たに5、6町歩の規模の開発を目指しているが、そこでは、市のHPを使って市内外から私たちのプランに同意してくれる人を公募して、関わってくれる人を育成・拡充するという方法も考えている。これから具体的な方向性を地元説明会などで説明するところ。そこで参加者が集まればいいが、そうでなくても市内外から人を誘致して進めていく予定である。

- 天王原は大事業であったが、後々になってみなさんの反響が大きくなってきた。やはりPRということは大事。うまいPRをして事業を周知することが非常に大事だと思うので、その点についてもお願いしたい。
- 担い手確保について、すぐにどうこうできるという解決策は難しいと思うが、今、流れに乗ってきている農家民宿について、だいぶ受け入れも増え、流れに乗り、種が蒔けてきていると思う。我が家でも、年に1、2回受けており、個人的にその後も手紙や農産物のやり取りをするなど、つながりができてきている。今後もつながりを深くするためには、各友好都市に売込みをしたらどうか。例えば、江戸川区に対して、安曇野市を江戸川区の畑にしてくださいなど。安曇野市の認知度も高まっているので、そういった取り組みをしてもいいのではないかと思う。
- 今注目を浴びている「関係人口」についても、安曇野市への移住を増やすだけでなく、関わりがある人を増やすことは、10年後20年後の先を見据えるうえで重要なので、友好都市との連携を新しいことを考えてほしい。
- 友好都市の江戸川区民祭りについては、わさび組合で毎年参加している。10万人程度の人出があるお祭りなので、出展でちらし等を配ったりして、PRすることも大事だと思う。
- 江戸川区民祭りのことは初めて聞いたが、そういったところで、市でブース等を設け、りんご、新米、ホップを使ったビールやワインなどを売り込めばいい。安曇野市で農家民宿を体験した生徒もおり、知名度があがってきているので、そこをうまく活かせばいい。
- 江戸川区民祭りには、旧穂高町の時代から、行政の力を借りながら、わさび組合、養鱒組合、酒商組合、ピフ穂高で初回から参加してきている。りんごも3トントラック1台分持っていくが、毎年完売している。出展に際しては、さまざまな手配等行政に助けをもらうことで続けられているので、今後もぜひ行政の支援をお願いしたい。
⇒農家民宿、友好都市との連携により関係人口拡大を目指したらいいのではないかという意見についても報告書に入れる。
- 移住して就農した人から話を聞いたところ、まず、何を作りたいか、どこでやりたいか決める際に、いろんな自治体へ足を運ぶが、そのときに移住者の暮らしや本音などが載っている冊子がとても参考になったと聞いた。松本市でも去年あたり、そのようなパンフレットを作っている。農業者を確保するために、移住してきた農業者の暮らしのリアルがわかるような資料を作るなど、ターゲットをしぼることも必要ではないか。安曇野市は農業をやるには恵まれた環境であると思うので、そのあたりの数値等も載せ、まとめれば就農希望者の心をつかめるものができるのではないかと思うので、そのあたりの工夫をぜひお願いしたいと思う。

(3)有害鳥獣対策について

- 資料1の3ページ「廃業する農家も後を絶たず」とあるが、市として具体的な数字を把握しているのか。根拠がないようなら、後を絶たないといういい方は強すぎるように思う。
- 次から次へと辞めていくわけではなく、ここ半年から1年くらいの中に「あの人もやめた、この人もやめた」というような話を聞くことがあっただけで、具体的に何軒辞めたのか数字を把握しているわけではない。表現としては、辞めた人もいるくらいの認識でいる。
⇒「後を絶たず」という部分については、表現を修正する。

『R1年度推進委員会報告書』を受けての市の今後(R2年度以降)の取り組み方針(案)
「人・農地プランについて」

- 人・農地プランの実質化についての地域での取り組みは、いまいちとを感じる。こういうプランがあるということは知っていても、仲間内で話していてもまだまだ周知ができていない。家の中でも若い人たちに渡すような話ができているという話もよく聞くが、そういうことを早め早めに手を打っておかないと、突然困った状況に陥る可能性がある。また、そういった情報を部落内で共有するというのが人・農地プランだと思うが、情報の共有の仕方がまだまだ浅い。一般の農家に周知できるよう行政でも説明周知をしてほしい。よろしくお願ひしたい。
- 人農地プランは、土地集積のイメージが強いが、そうではなくて、その地域の5年後、10年後の設計図を作るということが一番大事。例えば担い手がなくなった場合に、どこか別の担い手にやってもらうというような地域の設計図を作ることが必要。まだ土地の集積にばかりに目が向けられることが多いが、地域の設計図を作るということを話の中で出してもらおうと、理解してもらえるのではないかな。行政にはその点についてお願ひしたい。
⇒これからそういったことも含めて話し合いをしていきたいと思う。特に、行政がやる責務、農業委員さん・最適化推進委員さんに担っていただきたい部分などを明確化し、それぞれの役割分担を提示させていただきながら、JAも含め、地域の将来像を描ける場をどうやって設けていくかなども相談しながら進めさせていただきたいと思う。
- 農業委員会でも全面的に協力するので、軌道に乗るよう取り組んでほしい。また、市の今後の取り組み方針にも先ほど意見が出た農家民泊や友好都市との連携について記載をお願ひしたい。

「担い手の確保について」

- 南農高校には、年1、2名は県外からの受験者の入学がある。いろいろな地域を見て歩いた中で、安曇野が好きということで、一家転住してくる生徒の入学があるということが、今の農業高校の一つの流れである。入学してくる生徒の8割は非農家、2割が兼業もしくは専業農家。高校卒業後に農家に就職するのは、全国3万人の農業高校生のうち、280人。その後、農業大学校に進学した場合は、最近はほとんどが農業法人へ就職しており、特に、長野県の農業大学校は5年前に就農することを前提として受け入れるという方針を明確に打ち出したため、卒業後8割が就農しており、残り2割がJAなどの会社に就職している。南農高校の卒業生も、農業大学校に進学した生徒のほとんどが農業法人への就職や自分の家で就農している。長野県内の農業高校生に、農業校長会がとったアンケート結果によると、卒業後なんらかの農業に関する仕事に就きたいと思っている生徒の割合は約5割。しかし、他にやりたいことができたり、親からの反対があったり、農業に就けない子もいるので、県内農業高校生で農業関連産業(食品産業含む)に就職する割合は3割から4割。残りは、農業関連で土木系や、農福連携の勉強もするので福祉関連、アグリツーリズムの関係で、先ほど話ができた農家民泊に関連して、保育園や小学校の先生になる生徒もおり、それら含めると6割程度が農業に関連する職種に就職している。学力的に、この学校を選ぶ子もいるが、前期選抜で自己推薦で受験する生徒は農業がやりたいという意欲的な生徒。また、小さい頃から手伝いをしていたというような農業に親しんできたという子もいて、天王原の荒廃農地解消のボランティアに手を挙げて参加する生徒もいる。そういったことから農業の魅力というのはあると思う。今、農業大学校中心に農業法人の就職相談会を行っており、高校生もそこに参加させてもらっている。高校を卒業して、農業法人に入りたいという子たちが、そこに参加し、担い手のマッチングをもらっている。
- 高齢化が現実化してきており、個人で5反歩、1町歩をやるのが厳しくなってきた人が多く、農

地を引き受けてもらえないかという話が多く聞こえるようになってきた。昔は、親ができなくなったら子どもがやるのが当たり前だったが、今は子どもが遠くに行っていないというケースが多く、やる人がいなくなってしまう事例が増えている。70歳すぎてもコンバインに乗っている人も多いが、農業用機械の事故が増えることも懸念される。農業従事者の高齢化、遊休荒廃地の増加等これからどうなるのかと考えている。

- 後継者確保は共通課題。先日、学校教育課から、中学生議会の取り組みとして、中学生が、農業の後継者対策について話し合いをしたということで、そのことについて話を聞きに我が家に来た。これこそアクティブラーニングとして、やってもらいたいことだと思った。市の課題を中学生たちに投げかけて、彼らが10年後大人になったときには、農業人口は今より10%減するという現状を子どもたちに想像してもらい、どんな安曇野市になってもらいたいかということ課題として与えて、子どもたちが考え、それを市で盛り上げて話し合ってもらおうということは非常にいいと感じた。自分自身も20年先に農業をやっているのかなと考えたときに、若い人がこれからの安曇野市をどうしたいのか考えてもらい、新しい考え方をもらいたいと感じた。
- 担い手が喫緊の課題。営農懇談会などでうちの地域を何とかしてほしいという話が出て、そこに話を聞きに行くと、そうは言ってもまだできるという話になることが多い。農業は生涯現役ということで、どこで一線を引くかは悩ましいところ。健康寿命延伸のために仕事をとりあげるのはどうかということもある。人農地プランの実質化の際にも、このあたりが課題になるのではないかと感じている。地元の農事組合の話し合いでも70代以上の方がでてくることが多く、将来の話にはならない。実際話をしたい人と話ができている。そのあたりも大きなポイントである。積極的に応援したいと思う。

「その他」

- 高齢化が進んでいるので、ミストを背負って農薬をまくのも難しくなっており、ラジコンヘリの使用が増えているが、農薬は保安基準をクリアしたものでやっており、散布の際には前日に近隣へ説明に回るなど、注意を払っている。環境保全型農業の推進も大事ではあるが、農家にとって、農薬が必要な部分もあることを理解してもらうよう説明をすることも必要。前回の会議で、枝葉焼却についての苦情の話もあったが、農薬使用についても、正しい認識をもってもらうよう広報等を活用し、説明し、理解してもらうことが必要と感じる。
- 私のうちでは、5年位前からラジコンヘリに取り組んでいるが、それを見ていた近隣の兼業農家から、自分でやるよりも安くでき、1回で済むので、依頼されることが出てきた。昔は、8月に7回消毒していたが、薬がよくなり1回の消毒ですむようになった。ラジコンヘリでの散布を農家が受託することで収入が増え、安全にできるというメリットがあることを、周知することも必要ではないか。
- ラジコンヘリだけでなく、ドローンも増えてきている。また、GPSの活用も進んでいる。費用対効果はわからないが、担い手の方々は、スマート農業への取り組みが進んできている。「スマート農業の推進」という切り口で報告書等に記載を検討してほしい。
- 商工会は、流通の中心、農産物に付加価値をつけるということが役割だと思っているが、地元の農業者と商工業者の接点がなかなか見いだせない。マッチングの場、研究の場を設定できるよう努力していきたい。

「農家民宿について」

- 農家民宿で市にきて農業に興味をもってもらうのは、難しいと思う。農家民宿は、きっかけづく

りであって、後につなげられるかは、その後が開かれていることが重要。農家民宿をすれば、農業に関心をもってもらえるということにはつながらない。つながるための手段を講じる必要がある。そうでないと興味を持ったつぼみが開かない。ケアを丁寧にすることが、必要。それが安曇野市への興味、就農につながる可能性がある。農家民宿に来るのは、関東周辺の非農家が主。その子たちが、どういう気持ちできているかの分析、気持ちをどう向けるかの戦略をたてないといくらやっても意味がない。近所に受け入れ農家もいるが大変だと言っていた。1泊2日でできることは限られるので、その後の受け入れた側のケアが重要だと感じる。

- 子どもたちからの話や、感想文からは成長を感じとることはできている。ただ、農家民宿での体験によって就農するかは話が別。安曇野で農家民宿を体験するという、また、安曇野を希望する学校が多いということに意味がある。安曇野で体験、白馬で宿泊など、周回ルートの展開など、農家民宿には広がり可能性がある。受け入れの際には、子どもたちにこういう風になってもらいたいという狙いをたてて、旅行業者等にも話をしている。

農家さんの受け入れの苦労があることも事実だが、前向きにやってくれている方もいる。

- そこで食べた味、忘れられない味を体験してもらおうということも大事。そういった積み重ねを作ること、そこをPRするのも大事ではないか。商工会等でも協力をぜひお願いしたい。
- 子どもたちが感動するのは農業をすることではなく、農業をする人との出会いで気持ちが動く。そういったことのノウハウの勉強も行っていると思うが、取り組むべきである。旅行先への手紙には、子どもたちの本音が出ない部分もある。その本音をどう拾い上げるかも考え、そこをふまえてその後のひろがりを考えるべき。安曇野への関心をどうつなぎとめるか、友達に紹介してもらうにはどうしたらいいかを考えるべき。

以上